

HIP 催眠感受性尺度 日本語版作成のころみ

○曲淵由美子(東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科)
長谷川明弘(東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科)
キーワード:催眠感受性尺度、パーソナリティ傾向、尺度特性

【目的】 催眠は、さまざまな角度から研究と実践が進められてきた。研究や実践を推進する中で催眠感受性の測定手段を確立させることは一般の心理検査と同様に価値があると考えられる。広く使用されているヒルガードたちが開発したスタンフォード催眠感受性尺度は、所要時間が1時間と長く、研究協力者やクライアント、催眠実践者にとって不利益となる。短時間で測定できる催眠感受性尺度の有用性から本研究では、短時間で催眠感受性を測定できる The Hypnotic Induction Profile (HIP)に注目した。HIPは、H・スピーゲル(H. Spiegel)とD・スピーゲル(D. Spiegel)によって開発された。本研究では、HIPの日本語版尺度の作成を試みた。さらに、催眠感受性とパーソナリティ傾向との関連に着目し、HIP尺度の結果から検討した。

【方法】 本研究では、HIPの日本語版の指示書(催眠誘導プロフィール)を作成して、催眠感受性を測定した。HIPは、催眠感受性の程度と催眠状態に入る能力について、所用時間5~10分で、簡潔かつ詳細な評価を測る尺度として開発され、臨床用として用いられている尺度である。改訂版が2004年に出版されている(H. Spiegel & Spiegel, 2004)。日本語版の指示書は、筆頭発表者が原本を翻訳したものを、催眠を専門とする連名発表者に加えて臨床心理学専攻の大学院生を含めた数名で確認ならびに検討を行った。筆頭著者は、指導催眠士を有する連名著者からHIPの手続きについて指導を受けた。本研究では、筆頭著者が社会人大学院生10名に対し、催眠感受性と性格に関連する情報を集める面接調査、日本語版HIP指示書による催眠感受性の測定、YG性格検査、催眠時の現象に類似した日常体験についての質問紙(23項目)による調査を行い、その結果から催眠感受性とパーソナリティ傾向について検討した。

【結果】 HIP改訂版である新版と旧版を用いて結果を算出した。新版の16点法では、低感受性が1名、中感受性が5名、高感受性が4名という結果となった。新版では、ヒルガードによる催眠感受性が示す割合、低感受性(10~15%)、中感受性(75~85%)、高感受性(5~10%)に近い結果となった。YG性格検査との関連では、HIPの高催眠感受性の域では、新旧両版において、支配的、社会外交的、活動的、主観的、攻撃的、が含まれており、Barber (1956)の示した、支配性、社交性、客観性の欠如との関連を認めた結果を支持するものとなった。

【考察】 HIP検査の結果について、高催眠感受性がやや高いのは、参加者が催眠を体験することに対して大きく期待していることが関係しており、その期待感による影響が考えられた。本研究で示した主観性には、「ありそうもないことを空想する」ことが含まれており、Barber (1956)が示した客観的欠如と同様のものとして捉えることができると考えた。また、Barber & Glass (1962)の研究結果で、催眠感受性が高いほど空想を好む傾向にあるとしているところも一致していた。

本研究の課題としては、HIP尺度を使うことで、検査時間を15分と、短縮することができたが、HIPが想定している所要時間には達していない。HIPを用いる実施者の催眠誘導技能が十分ではなく、技術習得にさらなる時間を要すると考えた。大谷(2012)はHIPの個々の催眠感受性サブスケールの信頼性が極めて低いことを指摘している。本研究でHIP日本語版の翻訳はしたものの、尺度としての信頼性と妥当性については追求することができなかった。より測定尺度として条件を満たすために、HIP日本語版の信頼性と妥当性を確認する課題が残っている。本研究の限界としては、研究参加者が10名と少なく十分に分析や検討が行えなかったため、少数とはいえ、集められた結果を比較することで傾向を考察するに留まってしまった。

日本催眠医学心理学会 第67回大会 口頭発表
開催校 立命館大学

HIP催眠感受性尺度 日本語版作成のこころみ

曲淵由美子
(東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科)

長谷川明弘
(東洋英和女学院大学)

2022年2月19日 (金) 10:30~11:00

研究目的

催眠感受性の測定手段を確立させることの意義

- 一般の心理検査と同様に価値がある。
- 標準化された尺度の活用によって、クライアント一人ひとりに適した治療法を選択することが容易になることが主張されている(Barabasz & Perez, 2007)。
- ペカラ(Pekala, 2002)は「クライアントの催眠感受性を測定し、その可能性を理解することが治療の動機付けになる」とも述べている。

研究目的

高石・大谷(2012)は、「被験者の動機づけやラ・ポールなどの関係性を含む文脈によって催眠感受性が大きく影響を受けることは、日頃の臨床経験から明瞭に観察するところであり、このような経験から、治療前の尺度の得点そのものは社会心理学的な視点から見て、最も促進因子が少なく、本来の特性を反映するものと考えられる。従って、治療を選択するに当たって、この基本的催眠感受性をあらかじめ知ることは治療者にとって無意味ではない」と指摘している。

研究目的

- 催眠感受性を測定することが催眠を実施する側にとっても催眠誘導を受ける側にとっても有益に働くことが期待されます。
- ヒルガードたちが開発したスタンフォード催眠感受性尺度所要時間が1時間と長い点が不利益な面です。
- 催眠誘導プロフィール（HIP: the Hypnotic Induction profile）（Spiegel & Spiegel, 1978）は、所要時間が5～10分
- HIPの日本語版尺度の作成のこころみ
- 催眠感受性とパーソナリティ傾向との関連に着目し、HIP尺度の特徴を検討

方法

HIPの日本語版の指示書 (催眠誘導プロフィール)

- 日本語版の指示書は、筆頭発表者が原本を翻訳したものを、催眠を専門とする連名発表者に加え臨床心理学専攻の大学院生を含めた数名で訳語の確認ならびに検討を行った。
- 筆頭著者は、指導催眠士を有する連名著者からHIPの手続きについて指導を受けた。
- 本研究では、筆頭著者が社会人大学院生10名（年齢21～28歳、平均年齢24.1歳）に対し実施

方法

催眠感受性と パーソナリティ傾向

実施した検査と調査

- ① 催眠感受性と性格に関連する情報を集めるための面接調査
- ② 日本語版HIP指示書による催眠感受性の測定
- ③ YG性格検査
- ④ 催眠時の現象に類似した日常体験についての質問紙（23項目）による調査

方法

The Hypnotic Induction Profile について

『催眠誘導プロフィール (The Hypnotic Induction Profile) (Spiegel & Spiegel, 1978)』

- 催眠感受性の程度と催眠状態に入る能力について、簡潔かつ詳細な評価を測る尺度として開発され、臨床用として用いられている尺度である。
- 1960年代後半に、米国臨床催眠学会の会議で、Herbert Spiegelによって初めて発表された後、1972年に American Journal of Clinical Hypnosis (H. Spiegel, 1972)に発表されて以来、繰り返し改訂が行われた。
- 2004年には、より洗練された改訂版が出版される(H. Spiegel & Spiegel, 2004)。

方法

プロフィール12項目 (項目A～項目L)

プロフィール項目は、項目Aから項目Lの12項目

- 項目A：上目遣い (Up-Gaze)、
- 項目B：ロール (Roll)、
- 項目C：寄り目 (Squint)、
- 項目D：眼球回転サイン (Eye-Roll Sign)、
- 項目E：腕浮揚教示 (Arm Levitation Instruction)、
- 項目F：ヒリヒリ感 (Tingle)、
- 項目G：解離 (Dissociation)、
- 項目H：腕浮揚の合図 (Signaled Arm Levitation)、
- 項目I：コントロールの差異 (Control Differential)、
- 項目J：打ち切り (Cut-Off)、
- 項目K：健忘 (Amnesia)、
- 項目L：浮遊感 (Float)

EYE-ROLL SIGN FOR HYPNOTIZABILITY

UP-GAZE	SCORE	
		0
		1
		2
		3
		4

Spiegel, H. & Spiegel, D., (2004). *Trance and Treatment: Clinical Uses of Hypnosis (2nd Edition)*. Washington, DC: American Psychiatric Publishing.

Hypnotic Induction Profile Score Sheet

Hypnotic Induction Profile Score Sheet

Name (氏名) _____ Date (日付) _____

(開始) Sequence □ Initial (初期) Previous (前回) When (時間帯) _____

Position of Subject (被験者の姿勢) Standing (直立) Supine (仰向け) Chair (椅子) Chair-Stool (膝掛け・スツール)

Item(項目) Up-Gaze (上目遣い) 0 - 1 - 2 - 3 - 4

B (脱転) Roll 0 - 1 - 2 - 3 - 4

C (寄り目) Squint 0 - 1 - 2 - 3 - 4

D Eye-Roll Sign(roll and squint) (眼球回転合図) 0 - 1 - 2 - 3 - 4

E Arm(R/L) Levitation Instructor (腕挙揚 (左右) 試験) 0 - 1 - 2 - 3 - 4

F Tingle (ビリビリ感) 0 - - - 1 - 2

G Dissociation(解離) 0 - - - 1 - 2

H Levitation (浮上) no reinforcement (補強なし) 3 - 4
 (postinduction) 1st - - - 2 - 3
 (後誘導) 2nd - - - 1 - 2
 3rd - - - 1 - - Smile (微笑)
 4th - - - 0 - - Surprise (驚き)

I Control Differential (コントロールの差) 0 - - - 1 - 2

J Cut-Off (打ち切り) 0 - - - 1 - 2

K Amnesia to Cut-off (健忘) 0 - - - 1 - 2
 or No-Test (テストなし)

L Float (浮遊感) 0 - - - 1 - 2

Induction Score (誘導採点) _____

Summary Scores (総得点)
 Profile Score 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5
 (プロファイルスコア)
 (種実度) Soft 0 Zero (満点) Intact

Minutes (時間 (分)) _____ (減少) Decrement 増減なし Special Zero (満点) Special Intact

方法

催眠感受性とパーソナリティ傾向の研究背景

先行研究

- 催眠感受性とパーソナリティ特性との関係を調べた研究はこれまで多く見られる。
- バーバー (Barber, 1956) は、ギルフォード・チンメルマン気質検査を用いて実験を行い、優越性 (支配性)、社交性、情緒安定性及び客観性の欠如の4つの特性で、催眠感受性との間に有意な相関を得ている。
- バーバーとグラス (Barber and Glass, 1962) は、催眠感受性には新しい対人関係を形成するレディネスや想像的活動や空想を好む傾向などが関連していると述べています。
- しかし、斎藤 (1963) は矢田部ギルフォード性格検査を用いて催眠感受性との関係を調査しましたが、有意な相関は得られなかったと述べている。

新版・旧版スコア結果

HIPスコア分布 (新・旧)

旧尺度		新尺度	
0	②0.5	0	
1		1	
2	⑧2.0	2	②2.0
3		3	
4	⑤4.5	4	
5		5	
6	⑥6.5	6	⑧6.0
7	⑨7.0	7	
8	③8.5	8	⑤8.0
9	①9.0,④9.0,⑦9.0,⑩9.0	9	⑥9.0
10		10	
		11	③11.0⑨11.0
		12	
		13	①13.0,④13.0⑦13.0,⑩13.0
		14	
		15	
		16	

低催眠感受性 0～3.5
②⑧

中催眠感受性 3.5～7.5
⑤⑥⑨

高催眠感受性 7.5～10
①③④⑦⑩

低催眠感受性 0～6
②

中催眠感受性 6～12
③⑤⑥⑧⑨

高催眠感受性 12～16
①④⑦⑩

Hypnotic Induction Profile Score Sheet

Hypnotic Induction Profile Score Sheet

Name (氏名) _____ Date (日付) _____

(継続) Sequence Initial (初回) Previous (前回) When (時間帯)

Position of Subject (被験者の姿勢) Standing (直立) Supine (仰向け) Chair (椅子) Chair-Stool (膝掛け・スツール)

Item(項目) (眼球回転含む)

A	Up-Gaze (上目遣い)	0 - 1 - 2 - 3 - 4
B	(回転) Roll	0 - 1 - 2 - 3 - 4
C	(寄り目) Squint	0 - 1 - 2 - 3 - 4
D	Eye-Roll Sign (roll and squint) (眼球回転含む)	0 - 1 - 2 - 3 - 4
E	Arm(R-L) Levitation Instructor (腕浮揚(左右)誘導)	0 - 1 - 2 - 3 - 4
F	Tingle (ビリビリ感)	0 - 1 - 2
G	Dissociation(解離)	0 - 1 - 2
H	Levitation (手上げ) (postinduction) (後誘導)	no reinforcement (補助なし) 3 - 4 1st - 2 - 3 2nd - 1 - 2 3rd - 1 - 4th - 0 -
I	Control Differential (コントロールの差異)	0 - 1 - 2
J	Cut-Off (打ち切り)	0 - 1 - 2
K	Amnesia to Cut-off (健忘) or No-Test (テストなし)	0 - 1 - 2
L	Float (浮遊感)	0 - 1 - 2

Summary Scores (総得点)

Induction Score (誘導採点) Profile Score 0 - 1 - 2 - 3 - 4 - 5
(プロファイルスコア)
(優実度感) Soft 0 Zero (満点) Intact

Minutes (時間(分)) (減少) Decrement 特別採点なし Special Zero (満点) Special Intact

〈旧版〉

解離(項目G) + 1/2腕浮揚(項目H) + コントロールの差異(項目I) + 打ち切り(項目J) + 浮遊感(項目L)

〈新版〉

解離(項目G) + 腕浮揚(項目H) + コントロールの差異(項目I) + 打ち切り(項目J) + 浮遊感(項目L) + 浮揚誘導(項目E) + 健忘(項目K)

結果

- HIP改訂版である新版と旧版を用いて結果を算出した。
- 新版の16点法では、低感受性が1名、中感受性が5名、高感受性が4名という結果となった。
- 新版では、ヒルガードによる催眠感受性が示す割合、低感受性（10～15%）、中感受性（75～85%）、高感受性（5～10%）に近い結果となった。
- YG性格検査との関連では、HIPの高催眠感受性の領域に注目したところ、新旧両版において、支配的、社会外交的、活動的、主観的、攻撃的、が含まれており、バーバー（Barber, 1956）の示した、支配性、社交性、客観性の欠如との関連を認めた結果を支持するものとなった。

HIPスコア分布（新・旧）

旧尺牒		新尺牒	
0	②0.5	0	
1		1	
2	③2.0	2	②2.0
3		3	
4	⑤4.5	4	
5		5	
6	⑥6.5	6	⑧6.0
7	⑦7.0	7	
8	③8.5	8	⑤8.0
9	①9.0, ④9.0, ⑦9.0, ⑩9.0	9	⑥9.0
10		10	
		11	③11.0, ⑩11.0
		12	
		13	①13.0, ④13.0, ⑦13.0, ⑩13.0
		14	
		15	
		16	

低催眠感受性 0～3.5
②③

中催眠感受性 3.5～7.5
④⑤⑥⑦

高催眠感受性 7.5～10
⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

低催眠感受性 0～6
②

中催眠感受性 6～12
③④⑤⑥⑦

高催眠感受性 12～16
⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

- HIP検査の結果について見ると、高催眠感受性がやや高いのは、参加者が催眠を体験することに対して大きく期待していることが関係しており、その期待感による影響が考えられる。高石・大谷（2012）は、「催眠誘導では、社会認知要素、すなわち被験者のモチベーションや反応期待、役割取得といった要素を最大限に利用することが原則とされる」としている。
- 本研究で示した主観性には、「ありそうもないことを空想する」ことが含まれており、Barber（1956）が示した客観的欠如と同様のものとして捉えることができると考えた。
- Barber & Glass（1962）の研究結果で、催眠感受性が高いほど空想を好む傾向にあるとしているところも一致していた。

考察 ①

新、旧版それぞれの「催眠に類似した日常体験」の有無について、「ある」と回答した項目の数を見ると、低催眠感受性と中催眠感受性においては大きな違いはないが、高催眠感受性の領域では、相対的に高い数値を示していることがわかった。この結果から、高催眠感受性にある人は、日常においても催眠に類似する体験をしているということを示しているのだと思われる。

考 察 ②

考 察

課題と限界

課題

- HIP尺度を使うことで、検査時間を平均15分と、短縮することができたが、HIPが想定している5から10分という所要時間には達していない。
- HIPを行った実施者の催眠誘導技能が十分ではなく、技術習得にさらなる時間を要する。
- 信頼性と妥当性に関しても、大谷（2012）は、HIPの個々の催眠感受性サブスケールの信頼性が極めて低いことを指摘している。
- 尺度としての信頼性と妥当性については掘り下げて検討することができなかった。HIP日本語版の信頼性と妥当性を確認する課題が残っている。

限界

- 研究参加者が、20代女性10名と少なく、十分に分析や検討が行えなかったため、集められた結果を比較することで傾向を考察するに留まってしまった。

引用文献

Barber, T. X., & Glass, L. B. (1962). Significant factors in hypnotic behavior. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 64(3), p222-228.

John E. Alexander , Katy H. Stimpson , Jessie Kittle & David Spiegel, (2021). The Hypnotic Induction Profile (HIP) in Clinical Practice and Research, , *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, 69:1, 72-82.

Pekala, R.J.(2002). Operationalizing trance II: clinical application using a psychophenomenological approach, *Am J Clin Hypn.* Jan-Apr 2002;44(3-4):241-55.

斎藤稔正 (1964), 催眠感受性と性格特性に関する研究, *催眠学研究*, 第8号, p45-53.

Spiegel, H. (1972). An eye-roll test for hypnotizability. *American Journal of Clinical Hypnosis*, 15, 25-28.

Spiegel, H. & Spiegel, D., (2004). *Trance and Treatment: Clinical Uses of Hypnosis (2nd Edition)*. Washington, DC: American Psychiatric Publishing.

高石 昇・大谷 彰 (2012). *現代催眠原論-臨床・理論・検証*, 金剛出版

ご静聴いただき
誠にありがとうございました。